

そ 像と場としくみのデザイン

「像と場としくみのデザイン」は、まちづくりプランナーとして考えなければならぬ三つの要素として私が大切にしているものだ。

「像のデザイン」とは、そのまちの物的環境や社会的環境のあるべき姿を将来像として示すということのだが、そのまちのまちづくりエネルギーを凝集できるものでなければならぬ。住民の求めるものを集約的に表すこともあるが、まちづくり課題を踏まえながらプランナーとしての知識や経験から提案することが必要な場合も多い。

「場のデザイン」は、そのまちのまちづくりエネルギーを発生、共有、増幅させる社会的環境をつくるということで、主に人と人との関係によって成立するものといえる。それも場合によっては優れた「場＝空間」があることによって生まれることもある。

「しくみのデザイン」は、それらの「像」の発見・創造や、「場」の発生・増幅をうながし、それらを持続的に発展させる力の元となるものを示すことである。一般に「制度」と言われるものがイメージされるが、像や場のデザインと一体となった試行的まちづくりイベントや、まちづくりを持続的に推進する体制、組織づくりなども対象になる。

まちづくりプランナーとしてクライアントから期待されるのは、これらのうちどれかであることが多い。また、まちづくりプランナーとしても三つのどれかを売りとしていることもある。しかし「像」に限定して提案を求められても、その検討プロセスにおいては適切な「場」を設ける必要がある。「像」の提案のなかには「像」の実現に向けた「しくみ」の提案も含むことが重要になる。また、参加の「場」を設けることが求められても、「場」をつうじて優れた「像」が発見できなければ成果を生み出すことができない。「場」においても、まちづくりプランナーとして優れた「像」の提案をする力が求められる。優れた「場」が生まれた場合には、その「場」を一過性のものにしたくないという声が出される場合もあるし、「場」をつうじて「像」の実現を目指したいという気持ちが高まる場合も多い。まちづくりプランナーとして「像と場としくみのデザイン」は三位一体のものとして考えておく必要があるのだ。